

hito*yume
インタビュー

巻頭特集

紺野美沙子

「出会った先生それぞれに思い出があるんです」。デビュー以来変わらない、柔和で知的な瞳を輝かせる紺野さん。女優として活躍する一方で国連開発計画親善大使として国際交流を続け、さらに朗読公演も主宰する立場を通して、子どもと先生への熱い想いを語っていただいた。

【この みさこ】

東京都出身。慶応義塾大学卒業。1980年NHK連続テレビ小説「紅を織る」のヒロイン役で人気を博す。ドラマ、映画、舞台で活躍する一方、98年より国連開発計画の親善大使として、国際協力の分野でも活動中。2010年からは「紺野美沙子の朗読座」を主宰し、定期的に公演を続けている。

トッパンの、変革と挑戦。

これまで、世界地図が幾度も塗り直されてきたように、私たちトッパンも、印刷の枠組みを超え、世界の在り方の変革に貢献してきました。

その背景には、トッパンならではの「印刷テクノロジー」の存在があります。

印刷を核に挑戦を続け、体系化してきたさまざまな技術。社員一人ひとりに刻み込まれた知識、ノウハウ、おもい。これらを包含したものを、私たちは「印刷テクノロジー」と呼んでいます。

この「印刷テクノロジー」を軸に、分野の壁を越え、あなたのおもいに応えるパートナーに。人々の生活に、健康や安全、安心を届け、より心豊かなものに。情報やメディアの変化への対応、地球環境保全など、社会の課題解決の一翼を担う企業に。

私たちはお約束します。あなたの立場で考える、豊かで美しい感性を持つ多彩な「人財」が、トータルソリューションを生み出し、世界を変えていくことを。その変革を、決して止めないことを。

印刷テクノロジーで、 世界を変える。

TOPPAN

www.toppan.co.jp

凸版印刷株式会社 〒101-0024 東京都千代田区神田和泉町1番地

カトリック系の学校だったせいか、奉仕活動も盛んでしたね。
お年寄りの施設を訪問したり、バザーを主催してその売上げを寄付したり。
今の自分の活動にもつながっているのかな？



「小学校までの12年間は、君の宝物」。 温かな先生の文章に、心熱くした日。

「よろしくお願いします」
スマイレ色のワンピースに身を包み、軽やかな風とともに現れた紺野さん。柔らかな笑顔はテレビで拝見するそのままで。
ときおり昔にゆっくりと想いを馳せながら、気さくに語っていた。小学校時代。そこには人生に大きな影響を与えた、ある「瞬間」の存在が...

野山を駆け巡っては、虫をたくさん捕まえていた。

幼少時代のお話から伺います。どのようなご家族でしたか。

両親、そして姉と妹です。高校1年までは祖母が同居していたので、家族の中で、父は遠慮がちにいましたね。戦中戦後を生き抜いてきた母は「生活第一！」というパワフルな人で、祖母の介護もしながら働かしていました。

私は三姉妹の真ん中。姉と妹いわく私は「出しやばりな子」だったと。そうだったのかな。

子ども時代を過ごされたのは東京・狛江市ですね。

東京出身というと都会育ちみたいで

そして4年生のとき、カトリック系の私学・カリタス小学校に転校。新しい学校には馴染みましたが？

いいえ、最初は戸惑いましたよ。だってそれまでの級友はご近所や地元商店街のお子だったりしたが、転校先では夏休みに家族で海外旅行するよな級友もいて。大阪万博に新幹線で行った話を聞いて「あの新幹線に乗ったんだ！」と驚いたり。

困ったのが「フランス語」の授業。同

級生たちが1年から学んでいるフランス語は、全くわからない。外をほんやり眺めていると「マドモワゼル」と先生に注意されて、かなりへこみました。完全に落ちこぼれていましたね。

新しい学校は、私にとって大いなるカルチャーショックでした。

まさに異文化。どうやって乗り越えましたか。

担任の先生の、お力添えのおかげで

すけれど、実際は逆で自然豊かなのどかなところで育ちました。小さな頃は一日中外遊びで過ごしました。原っぱや雑木林、小川を駆け巡り、缶けりしたり、勝手に人様の庭に生えたタケノコを掘ったり、シロツメクサを摘んで首飾りをつくったり。畑のキャベツの葉についた青虫や、カマキリを捕まえるのも大好きで。幼稚園も一日も休まず、遊び回っていましたね。

まさに元気いっぱい自然児。そして地元の公立小学校に入学。

高度経済成長期だった当時は児童数も多く、一クラス50人くらい。私は背が高く後ろの席になってしまい、「先生が遠い」と感じたのを覚えています。1年生のときの係は「歳がバレちゃいますけど、石炭ストロブの石炭係」といっても、なんのことかわからないですよ？

自分の教室にもありましたので、存

すね。スムーズに馴染めるよう、優しく気を遣ってもらいました。

仲良くなった友人にも支えられた。友人の推薦でクラス委員になったり、生徒会活動では副会長を務めたり。それまでの私は比較のおとなしい子でしたが、転校生ということで注目されるうちに何でも積極的に取り組むようになつたんです。転校をきっかけに変わりましたね。

アメとムチで鍛えられた演劇クラブの猛練習。

そして5年生のとき、「女優」を意識する出来事があったとか。

演劇クラブに入って、演劇コンクールで上演する『安寿と厨子王』の安寿役に選ばれたんです。部員全員がオーディションを受けて、顧問の先生に選んでもらえたときは、すごく嬉しかったですね。

それからは猛練習。先生はとても熱心で厳しくて。アメとムチの指導。うーん、ムチのほうが多かったかな。うまくできないと「その役、誰かに代わってもらおうかしら？」なんて言ったりして（笑）。でもその先生のおかげで、



小学校高学年の頃。仲良し3姉妹で記念撮影。
(左端が紺野さん)

じております。

本当に!? 若い人に「学校のストロブに石炭入れていた」なんて言うのと、ひかれちゃうから（笑）。

担任の先生は優しく大好きでした。うちで猫を飼っていたんですが、生まれた仔猫を先生に引き取ってもらえて嬉しかったですね。

2年の担任は体育の先生。朝礼でラジオ体操をする雄姿に憧れました。3年のときは年配の先生で、休み時間には白髪を抜いてあげていた（笑）。どの先生とも仲が良かったです。

転校のカルチャーショック。生徒会など活発に活動。

部員たちは団結してがんばりましたね。本番は横浜の大ホール。その舞台上で一生懸命演じました。それまでは、将来は学校の先生かな、と思っていたんですが、そのときから「お芝居する人になれたらいいな」と。今の仕事をやるきっかけをつくってくれた先生にはとても感謝していますね。

自叙伝に寄せられた、先生の温かなメッセージ。

小学校時代でいちばん思い出深い先生は。

6年のときの担任の先生ですね。6年生では小学校の卒論的な、自叙伝を書く課題がありました。「それまでの自分の人生と向き合う」目的で。そこで私は物心ついたときからそれまでのことを原稿用紙30枚くらいに何とか書き上げて、提出したんです。

帰ってきた原稿に驚きました。そこには原稿用紙半分くらいに、達筆な字で感想が埋め尽くされていた。『これまでの君の12年間は家族や友達に支えられたもの。君にとって宝物だから、これからもそれを忘れずに羽ばたいてください』と。その温かい言葉に、胸



高校2年生のとき。修学旅行で倉敷市の美観地区へ。

が熱くなりましたね。
生徒一人ひとりに丁寧に向き合ってくれた先生方のおかげで、小学校時代はいい思い出ばかり。この歳になると、当時はすごく懐かしく思い出されてくるんですが、あの頃、共に過ごした先生、友達すべてが一生の宝物だとつくづく感じています。

好きな先生の教える科目に 励んだ女子校時代。

そして中等部へ進学。好きな科目は何でしたか。

国語の音読の時間や、理科の実験や美術、体育ですね。椅子にじっと座っていない授業が好きでした。中学1年ときの担任は、新任の地理の先生。その先生に憧れて、それはもう熱心に白地図を塗りましたよ。

思い出は先生の誕生日。友達の家でマドレーヌを焼いて、ネクタイを買って行って。先生が住んでいた月見荘というアパートにプレゼントを届けました。そのネクタイを先生が学校にきてくれたときは、みんなで「キヤー！」と大騒ぎ。

はしゃぐ様子が目に浮かびます。

もう女子校ですから(笑)。2年のときは化学の先生。この先生も大好きで、一生懸命元素記号を覚えました。

高校、大学の文学部へと進まれるなか、小学校のときに抱いた女優への夢はもち続けましたか？

周りの人に話すと「なー!？」と言われて、胸に秘めていましたね。でも現実には厳しいし、高校生のときはもう無理だと思っていました。転機は高3のとき。叔父が私の写真をカメラ雑誌に投稿したのがきっかけになって、映画デビューにつながったんです。

日本では先生に 「タメ口」をきく?

その翌年には朝の連続テレビ小説のヒロインとして大きな話題に。小学生時代の夢をかなえたのですね。以来女優として活躍の一方で、国連開発計画(以下UNDP)の親善大使としても活動されています。

UNDPは、開発途上の国や地域が



UNDP親善大使としての活動の様子。上:2010年パキスタン 下:2003年ガーナ ©Shinji Shinoda

独り立ちできるまでのさまざまな支援をする国連の組織です。98年に親善大使に任命されて以来、17年間にわたってカンボジア、パレスチナ、ブータン、ガーナ、東ティモール、ベトナム、モザンビル、タンザニア、パキスタンの9カ国を訪問し、現地の方々とさまざまな交流をしてきました。

学校ということで印象深かったのは、ベトナムの小学校。当地では先生はとても尊敬されているんです。すれ違えば子どもたちはきちんと挨拶するし、声をかけられれば「はい!」と礼儀正しく背筋を伸ばす。昔の日本みたいでいいなあと思いましたね。

そのベトナムの先生が以前日本を訪問したときにとっても驚いたことは、「日本では生徒が先生と同等の口をきくこと。日本では「タメ口」をきいている!と。また日本の給食制度はすばらしいとも感心されていました。

初等教育も受けられない 子どもたちの存在。

開発途上の国々には、学校に通いたくても通えない境遇の子どもたちも多いと聞きます。

はい。カンボジアを訪問した際も貧しい農村部で就学できない子どもたちの思いを痛切に感じました。改めて日本は教育に恵まれた国だと。訪問して感じることは、たまたま生まれた地域によって、どうしてこんなに格差があるんだろう?ということ。そうした初等教育すら受けられない子どもたちの存在を知ってほしいし、彼らに

優しい思いももってほしい。だけど「かわいそう」だけで終わらせないことも大事なんです。日本に生まれた自分たちは恵まれた環境にいる。だからこそ、彼らの分まで自分ができることをがんばろう、勉強して格差をなくす方法を見つけよう、と、一歩進んでとらえてほしいと思います。

Think Globally, Act Locally.
世界を視野に、自分たちのできることをがんばる。

自分ができることをがんばることが、国際協力にもつながると。

好きな言葉は「Think Globally, Act Locally」。「国際的な視野をもちながら、足元から行動せよ」。

つまり子どもならたくさん遊んで勉強して、その時代にしかできないことを一生懸命やる。それぞれが自分らしく、できることを行動することが大切だと思いますね。

親善大使に任命された当初は「国際情勢に詳しくあらねば!」という気負いもありました。今では自分の本業に取り組むことでこの活動も知っていただけはず、いちばん大切な「思いやりの心」も「演じる」ことによってさらに伝わるはずだと信じていますね。

話し方を工夫すると、 子どもは全身で聴く。

近年は「紺野美沙子の朗読座」を主宰され、各地で公演もされています。朗読活動を始められたきっかけは。

自分も50歳を過ぎ、ひとつ、根っことして続けていけるライフワークをも

子どもそのものが、未来。 だから先生は、未来を支える仕事。

ちたいと思ったのがきっかけです。今はネットやスマホなどで何でも楽しめる時代。だからこそ、ひとつの空間に皆が集まり、ライブを楽しんで、心穏やかなひとときを共有することに代えたい価値があると考えました。それも、平和だからこそできることなんですよ。

「聴く」ことで自由に想像の世界を広げてもらいたい。日本語の美しさや思いやりの大切さを伝えていきたいと願って活動しています。

子どもたちへの公演では、昨年富山県の小学校で『鶴の恩返し』を上演しました。

公演の反応はいかがでしたか。

とても熱心に、最後まで観てくれました。「知っていた話だけど印象が違っておもしろかった!」「聴いていて心地よかった」と感想文を送ってくれて嬉しかったですね。

退屈せず集中させるには、話し手の「話す力」って重要ですね。授業をされる先生方にもいえることでしょうか。

「じっと聴く」のが苦手な子ども多いと聞きます。話を集中して聴かせるコツはありますか。

ツは?

興味を引き出すべく、あらゆる工夫をすること。私の朗読では映像や音楽を組み合わせたリ、また二十五弦箏という琴を使うんですが、その紹介に『妖怪ウォッチ』を奏でて『日本の楽器でこんなことできるの!』と驚かせたり。「ツカミはOK!」状態で本題に入ると、グータツと子どもたちは集中してくれました。そして良い内容と信じるものを伝えれば、1年生の子にもしっかりと伝わるんですよ。

子どもは先生の何気ない言葉をずっと覚えてる。

多彩な活動をされる紺野さんの、今お気に入りの時間は。

「めんどくさい」
糠床育て。糠漬けが好きで、20年来育っています。子どもが手を離れた今は、糠床が私の第二の子どもか



2012年、陸前高田市の中学校での朗読の公演の様子。被災地に心温まるひとときを届けた。

構い過ぎて過保護でもだめだし、放任でもだめ。ほんと、子育てに似ていると思う!

子育ての極意にもつながる深い世界とは…。次世代を担う子どもたちに望むことは。

学校の勉強も大切だけど、「おもしろそう!」「やってみたい!」と思ったことがあれば、何でも挑戦してみてくださいですね。

日々奮闘する先生方へもメッセージをお願いします。

子どもそのものが未来だから、先生は未来を支える仕事。つくづく学校の先生って、すてきな仕事だと思う。

先生方には、子どもたちとの会話をぜひ大切にしてほしいです。授業も大切だけど、放課後や給食の時間にかけて、何気ない言葉を大切に。なるべく具体的な声かけができるといいですね。前回20点の漢字テストが30点上がった子がいれば、「よーし。まだまだい

けるな!」とか、「勉強はともかく、足は速いな!」とか笑。

先生に認めてもらえると、子どもは本当に嬉しい。先生は忘れても、子どもはずっとその言葉を覚えていて、支えにしているんです。

ゆとりの心と、「明るいオタク」の精神で。

一方で、今は保護者の方の対応など、先生自身緊張を強いられる場面も多

私も女優として本番に臨むとき、今でもものすごく緊張するんですよ。そこは先生と一緒にです。だけど、緊張する一方で、ゆとりの心ももっていたい。自分にゆとりがないと、それが相手に伝わってしまうから。

ゆとりの心って、人から何か言われても、どこか明るく受け流す、明るい強さのことだと思うんです。「その通り、俺は足が遅いけど、それが何?」なんて、自分の弱点をあえてネタにして明るく受け流せるような。

目指すは「言う人は言うさ」と受け流せる、明るいオタクの精神! そんないい意味のいい加減さと、プ

れない強さで、がんばり過ぎないようにがんばって、自分らしい先生でいてほしいと願っていますね。

写真撮影中のこと。紺野さんは突然「あつ」と息を呑んで歓声を挙げた。「可愛い!」。

目を丸くする一同の前、視線の先には何の変哲もないソファが。「足! そのソファの足の形、すごく可愛い! どうしてそんな形しているんだらう?」。

本誌の表紙を眺めては「わあステキ! どなたの絵ですか」と熱心に問う。日常のささいなことにも素直に感動する心、感性をもち続けている方だと感じた。

地球規模の視野をもちつつ、「明るいオタク」のバイタリティで日々進む。その優しい微笑みに、元気をもらった気がした。

読者プレゼント!

紺野さんの直筆サイン入り著書「ラララ親善大使」を5名様にプレゼントいたします。応募の詳細は35ページをご覧ください。

息子にはいつも「人と違うことを恐れるな」と言っています。それで人に何か言われても、明るく受け流してしまえばいいんです。

